企画・制作：神奈川新聞社クロスメディア営業局

第15回

神奈川大学高大連携協議会フォーラム

昨年12月3日、第15回神奈川大学高大連携協議会フォーラムが開催された。今回のテーマは「持続可能な未来に向けて―SDGs教育の在り方―」というもの。SDGsの時代にあって、求められる人材と教育の役割についての基調講演、教育現場での取り組みの実践発表が行われた。会場は昨年4月にオープンしたばかりの神奈川大学みなとみらいキャンパス・米田吉盛記念ホール。新型コロナウイルス禍で2年振りの開催となり、当日も厳重な感染症対策の下、フォーラムに先だって行われた第37回神奈川大学高大連携協議会も合わせ、多くの高校・大学関係者が参加、熱心に耳を傾けた。講演と報告の概要を紹介する。

司会：神奈川大学総務部総務課 緒方 萌

開会あいさつ

寛容で多様な価値観を共有できる人材育成を

神奈川大学長
神奈川大学高大連携協議会会長
兼子 良夫

新型コロナウイルス感染症による未曾有の災禍の中、本フォーラムを開催できますことは主催者として大きな喜びです。ご登壇いただく皆さんに心より御礼申し上げます。

15回目を迎える本フォーラムのテーマは「持続可能な未来に向けて―SDGs教育の在り方―」です。

SDGsの実現、ESG投資(※)に真剣に取り組む企業に注目が集まる中、教育現場においてもSDGs教育の重要性が説かれています。人種、民族、宗教を超えて、寛容で多様な価値観を共有できる人類共生の持続可能な社会を創生するなど、社会的課題解決に向けた取り組みをより一層強化しています(下段コラム参照)。本日のフォーラムで、多くの方がSDGsへの思いを共有し幅広い取り組みへのきっかけになれば、と願っています。

※ESG:環境(Enviroment)、社会(Social)、ガバナンス(Governance)の英語の頭文字を合わせた言葉。企業が長期的に成長するためには、経営においてESGの三つの観点が必要だという考え方

人材育成は、私たち教育機関の重要な使命となっています。

本学は、創立者の米田吉盛の「教育は人を造るにあり」の理念の下、勉学意欲を持つ方々に、草創期から幅広く学修の機会を提供してきました。これは、「誰一人取り残さない」というSDGsの精神と一致するものです。2018年9月には「神奈川大学ダイバーシティ宣言」を、19年4月には「SDGsへの神奈川大学のコミットメント」を表明するなど、社会的課題解決に向けた取り組みをより一層強化しています(下段コラム参照)。本日のフォーラムで、多くの方がSDGsへの思いを共有し幅広い取り組みへのきっかけになれば、と願っています。

※ESG:環境(Enviroment)、社会(Social)、ガバナンス(Governance)の英語の頭文字を合わせた言葉。企業が長期的に成長するためには、経営においてESGの三つの観点が必要だという考え方

基調講演

社会が求める人材とは

SDGsの時代、社会が求める人材と教育の役割①

株式会社WATASU代表取締役社長
株式会社グローバルセールスパートナーズ
代表取締役 他
高塚 苑美氏

VUCAの時代、3ステージモデルの終焉

SDGsの時代、社会が求めるのはどんな人材なのでしょうか。社会、あるいは企業で、これから必要とされるのはどういう力なのでしょうか。

10年ほど前から、今は「VUCAの時代」だといわれています。VUCAとは、「Volatility(変動性)」「Uncertainty(不確実性)」「Complexity(複雑性)」「Ambiguity(曖昧性)」の頭文字をとった言葉です。つまり、現代は混沌とした世の中で先を見通すことがとても難しい時代。その時代を今の子どもたちは生きて行かなければなりません。確かなものを自分の力で探していく、そんな力が求められているのです。

今、私たちは社会に出たばかりの方たちに「もう3ステージモデルは終わりましたよ」とお伝えするようにしています。

若いうちに教育を受け、18歳で大学に入り22歳で卒業。その後企業に勤め、そこで勤め上げる。60代で引退。これが3ステージモデルです。企業の中で通じる、勤め上げるための力を身に付ける、それがこれまでの教育でした。

しかし、これからは「人生100年時代」です。この時代のステージモデルとはどういうものでしょうか。教育を受けて社会に出るけれども、それは勤め上げるために企業に入るということではありません。そこから自分のキャリアを考え、もう一度学び直しをして、例えば起業をする人もあるかもしれません。起業し、キャリアアップして、さらに学び直してセカンドキャリアを持つ人もいるでしょう。考え方によっては、全く違うキャリアを2周、3周とつくることが可能な時代がこれからの時代ではないかと思います。

こうした中で、時代とともに教育も変わらなければならない。求められる人材も変わっていかなければならない。これがこれからの社会のニーズになると思います。

自ら思考し問いを見つけ、行動を生み出す力

昔、インターネットもなかった頃には、情報は教育者(大人)がたくさん持っていました。何事も先生に教えてもらわないとわからない時代でもありました。

しかし、今は学生や子どもたちの方がものごとをたくさん知っています。子どもはプログラミングできるけれど大人はできません。そんな時代、本当に今までどおりの教育でいいのか考える必要があるのではないでしょうか。

おそらく、2040年には一家に一台ロボットがいるのが普通の時代になっていると思います。

そんな社会で求められる力とは何でしょうか。まず、自ら思考する力です。次にたくさんの情報の中から自分で考え、課題を見つけ、次の行動を生み出せる力です。つまり思考力、共創力、そして創造力ですね。これは大人になってから身に付けるのはなかなか大変です。ぜひ、10代のうちに身に付けてほしいと思っています。

身に付けてほしい「自信」

さまざまな力が求められる時代ですが、10代のうちに最も身に付けてほしいのが、自分を信じる力、「自信」です。

自分はできる、と信じる力。これを10代のうちに身に付けておくと、大人になってから、例えば何かの壁に突き当たったときなど、それにチャレンジする姿勢につなげることができます。これがもし子どもの頃に育たないと自己効力感の低い子ども、自己効力感の低い社会人、難しいことに直面したら諦める社会人になってしまうわけですね。

「自信」をどう育てていけばいいのでしょうか。私は自分軸で自分を評価できることが大切ではないだろうかと思っています。ぜひ教育の現場で、人からの評価に左右されるのではなく、自分はこう考え、こうトライしたからこの結果なんだ、と自分軸を持てるようになってほしい。そんな子どもたちを育てていただきたいと思います。

基調講演

SDGsの時代、社会が求める人材と教育の役割②

教育の役割

持続可能な未来に向けて―SDGs教育の在り方―

株式会社WATASU取締役
株式会社EDUCATION design
代表取締役
宇都宮海星女子学院中学校・高等学校
校長補佐
小野田 一樹氏

本当に社会に出て活躍するために必要な力

2019年に、日本財団が18歳の若者を対象に行った「あなた自身についてお答えください」という意識調査に特徴的な傾向が見られました。

要約すると、今の若者たちは「社会は悪くなる」「自分には社会は変えられない」「自分には責任がない」と感じながら社会に出ていく、というものです。

また、新卒で入った社員が3年間で3割離職してしまうという問題は、この30年間変わっていません。若い世代の死因の第1位が自殺というのは先進国で日本だけです。

これらの要因として、「現状の教育は受験のための学問中心の教育で、今の社会はどんな状況で、自分たちはこれからどう生きていけばいいのかといった教育が不足しているのではないか」(東洋経済オンライン)という指摘もあります。若者が自己肯定感を持ち「本当に社会に出て活躍できるために必要な力」を身に付けるためにはどうすればいいのでしょうか。

文部科学省の「新時代に対応した高等学校教育の在り方」には、そのポイントとして「高等学校においては…高等教育機関や実社会との接続機能を果たすことが求められており…」と書いています。

「実社会との接続機能を果たす」。これがこれからの高等学校教育の在り方の重要なポイントになると思います。

探究学習と社会との接続

そこで注目されるのが、19年度から先行導入されている「総合的な探究の時間」です。

本当に社会に出て活躍できる能力を、私は次の二つだと思っています。一つが「メタ認知」(Metacognition)です。自分を客観的に認識し、問題発見・解決できる能力のことです。もう一つは「レジリエンス」(Resilience)。さまざまな環境・状況に適応し、強くしなやかに生きていく力のことです。

これを学校の現場でどう身に付けさせるか。「メタ認知」はグループワークやディスカッションの中で、できるだけ他人の意見を聞き、自分の意見も発表する機会をたくさんつくること、「レジリエンス」は、実践での成功(失敗)体験を積み重ねることです。

これを授業や学校行事、部活やフィールドワークの中で繰り返し行うことが大切です。

さらにはこれをできるだけ社会と接続させていくことです。社会とは校外、つまり大学などの高等機関、企業、NPO、NGO、他の学校の生徒さんと共同できる機会をできるだけたくさんつくってあげることです。要は社会へ出るための準備、それが総合的な探究の時間だと言えるでしょう。

SDGsの若者への広がり

学習指導要領では総合的な探究の時間の課題を四つ推奨しています。その一つ「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題」は、まさにSDGsそのものです。

SDGsの認知度は、20年から21年にかけて急激に伸び、54・2%となっています。特に十代の関心が高いことが特徴です。

しかし、SDGsを探究の課題に設定することにおける注意点もあります。「3R」という言葉で表現されますが、「リスク」(Risk)、「リアリティ」(Reality)、「レスポンシビリティ」(Responsibility)です。それに取り組むことに対するリスクはないか、現実的なテーマか、責任を負っているか、ということです。

また、SDGsの17の視点に立つと、例えば沖縄の基地問題を学ぶことが、平和や環境問題の学習、基地の周辺の住民や在留アメリカ人の問題などにつながってきます。一つをクリアすることによってそこに絡んださまざまな問題が浮き彫りになってくるのです。

先ほど、大切なのは探究学習を社会とつなげること、とお伝えしましたが、特に、他校との連携に注目し、最近、「SDGs放課後プロジェクト」という活動を始めました。これは、9月から3月まで隔週水曜日、全12回、補習の位置付けで行っています。参加者は8都県10校、約150人が学校ごちゃ混ぜでチームを作り、オンラインで探究学習を行うおそらく国内初の試みです。これを可能にしたのは、やはり若者のSDGsへの関心の高さではないでしょうか。「SDGsだからつながれる」ということだと思います。

「高等教育機関と実社会との接続機能を果たす」というこれからの高校の在り方、まさにSDGsはそれを実践するための貴重なツールだと思います。

これからは、持続可能な社会へとシフトしない限りそのリスクを負っているのは、私たち大人ではありません。今の若者たちやそのさらに子どもの世代です。その若者たちがSDGsに真剣に取り組もうとしているのであれば、その背中を押してあげる。それが私たち、学校教育に携わる者の使命ではないでしょうか。

SDGs放課後プロジェクト

実践発表

SDGsを通して主体性を育む

―神奈川大学附属中・高等学校での実践報告―

神奈川大学附属中・高等学校
国語科教諭
大場 愛美氏

2019年度 中学2年

中学2年生は「総合的な学習の時間」と国語の授業で行いました。2年生は東京での地域調査・校外学習を行いました。探究的な学習方法を用い、SDGsを課題設定の視点の一つとして取り扱いました。生徒は課題設定が苦手ですが、SDGsは解決の難しい17もの課題が掲げられています。それを一つの視点として取り上げることで生徒たちの課題設定を後押しすることができました。

実際の調査は安全管理のしやすい銀座線に絞り、浅草、上野、銀座日本橋、虎ノ門周辺で行いました。この中で自由にSDGsについて調べてくる、という設定で、事前に4日間、事後に2日間費やしました。

SDGsそのものについては、事前にクイズをしたり、動画などを見て理解を深めました。具体的には、例えば「ファストファッション」を切り口に、大量生産、大量消費、大量廃棄、あるいは貧困について考えるワークショップなどを行いました。

2020年度 中学3年

国語と道徳の授業で行いました。国語としては書く力をつける授業の一つとして扱い、動画を見たり新書の読書をしたりして事前学習を行いました。道徳の授業ではJICA(国際協力機構)の方をお呼びして講演をしていただき、最後に国語の授業でエッセイを書くという流れで実施しました。

附属高校への内部進学者にとっては高校入試を受験する機会がないため、「どうして勉強をするのか」「どうして高校へ行くのか」「どうやって学んで、どうやって社会人になっていくのか」などを考える機会が少ないので、中学3年生の夏、改めて考えてほしいと思い、提示しました。

扱ったのは、SDGsの4番目の目標「質の高い教育をみんなに」の1項目。児童労働や貧困に関する国連の動画や講演会、自分の経験で学んだことや感じたことををJICAのエッセイコンクールに応募するという形で表現しました。

2021年度 高校1年・中学3年

高校1年・中学3年は総合的な探究の時間で扱います。「主体的に考え、判断し、行動する力」は、探究の学習で身に付いた探究力、主に授業で身に付けられる基礎学力、キャリア教育で身に付けられる自己理解力の三つで構成されます。

総合的な探究の時間は、高1・中3の2学年同時に行っております。分野別のゼミ形式で、今年度はゼミが23件あります。1学期はテーマ設定、夏休みに情報収集、2学期に集めた情報の整理・分析、中間発表、そして3学期に論文作成を行います。テーマ設定は自由ですが、「風力発電」「耐震構造」などSDGsに沿ったテーマも見受けられます。

目的とゴールの明確な提示、興味、関心につながる情報提供はとても大切だと感じております。また、フィールドワークの安全管理などは難しい問題ですが、解決策の一つとして、保護者、卒業生など校外との連携も有効だと思います。

生徒も私たちも限られた時間の中で取り組んでいます。難しさもありますが、繰り返し課題としてSDGsを取り上げ、一人でも多くの生徒に種をまいていくことが大切ではないかと思っています。

本校は緑豊かな横浜市緑区に立地し、創立37年の私学で、男女共学中高一貫校です。

本校の生徒の目標の一つに「主体的に考え、判断し、行動する」があるのですが、SDGsによる学習はまさにそれを体現したものだと感じています。中学2年生と3年生の総合的な学習の時間、中学3年生の国語、そして高校1年生の総合的な探究の時間で扱います。

神奈川大学におけるSDGsに関する取り組み

神奈川大学は、2018年9月「神奈川大学ダイバーシティ宣言」を表明、世界の恒久平和と人類の幸福に貢献できる市民を育成し差別や偏見の根源的な解決を目指すことを誓った。19年4月にはSDGsに対する全学的な決意「SDGsへの神奈川大学コミットメント」を表明し、事業計画の重点項目にもSDGsの推進を掲げ、SDGs達成に向けた研究、教育に注力している。

19年から開始されたイギリスのタイムズ・ハイヤー・エデュケーション(THE)による、大学の社会貢献度をSDGsの枠組みで可視化する「THE Impact Rankings」において、神奈川大学は初年度から3年連続で指標となる全SDGsにランクインしている。

みなとみらいキャンパスの開設では、建設会社の選定にあたり、会社としてのESG投資への考え方を重要な項目とした。また、社会連携センターを設置し、企業とのパートナーシップ協定、大学間連携協定、自治体との包括連携協定などに基づき、環境、経済、社会的課題に対し産官学連携の取り組みを一層強化している。

SDGsの推進には、兼子学長のリーダーシップのもと、担当の副学長、担当の学長補佐を配置し、学生、教員、職員がさまざまな形で連携し、持続可能な仕組みを導入している。全学的な体制の下、学生が主体となり各種課題解決に取り組む「教育事業」、教員の最先端の研究活動でアプローチする「研究事業」、地域とのつながりの中で産官学民連携で取り組む「社会貢献事業」、環境に配慮した施設をつくる「施設事業」の四つの視点を掲げ、取り組んでいる。

例えば、工学部機械工学科による「超小型衛星専用の超小型ロケット開発」は、低コストで安全性の高いハイブリッドロケットの開発(打ち上げ高度10.7kmの日本記録を樹立)を目指したもので、気候変動などの問題に対応することが目的だ。その他「持続可能な郊外住宅地モデルプロジェクトへの参画』(工学部建築学科＝本年4月より建築学部として再編)、「脱炭素社会に向けた新エネルギーの経済・環境評価分析」(経済学部経済学科)、「高齢化に対応する竹山団地プロジェクト」、「まち×学生プロジェクト」、「環境に配慮したみなとみらいキャンパス」など、四つの視点に基づいたさまざまなテーマでの取り組みが進行中だ。

神奈川大学では、大学ホームページ内にSDGsの理念、学長コミットメント、取り組み事例などをSDGsのゴールと関連させ可視化している。また、関係団体と連携し、優れた取り組みを行っている学生団体などを表彰するイベントなども予定されている。

高齢化に対応する竹山団地プロジェクト